

## 第 2 章 疫 学

### I 疫 学

全国的な疫学調査としては、1993～1995 年にかけて行われた日本眼科医会アレルギー眼疾患調査研究班による疫学調査(以下、日本眼科医会疫学調査)がある。全国 28 施設(大学病院 7 施設、総合病院 5 施設、眼科病・医院 16 施設)を定点とし、1993 年 1 月 1 日～1995 年 12 月 31 日までの 3 年間に受診したアレルギー性結膜疾患患者全員に対して調査票を用いて行われた。また、1993 年に厚生省アレルギー総合事業疫学調査班によるフィールド調査が行われている。しかし、ランダムサンプリング法による全国的な疫学調査は行われていないため、以下の数字は推計値である。

### II 有 病 率

1993 年に厚生省アレルギー総合事業疫学調査班によってなされた調査では、両眼の眼癢痒感を持つ者は、全人口のうち小児(15 歳未満)16.1%、成人 21.1%、医師によりアレルギー性結膜疾患と診断されたことがある者は、小児 12.2%、成人 14.8% であった。このことより全人口の約 15～20% がアレルギー性結膜疾患を有すると推定される。

### III 男 女 比

SAC, PAC では女性が男性の約 2 倍を占め、VKC

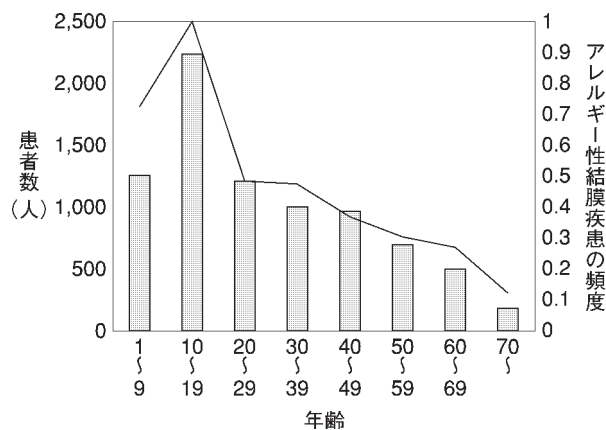


図 2-1 アレルギー性結膜疾患の年齢分布<sup>3)</sup>。

アレルギー性結膜疾患で調査定点施設を受診した患者数は 10 代にピークがあり、加齢に伴い減少している。年齢別の疾患頻度(各年齢層の受診者数を我が国の同年齢層の人口で割ったもの、10 代の頻度を 1 とした比率で表す)においても 10 代で最も高く、加齢に伴い低くなる(文献 3)より日本眼科医会の許可を得て転載)。

■ : 患者数(人)  
 — : 人口で補正した疾患頻度 (10 歳代を 1 とした比率)

では逆に男性が女性の 2 倍である<sup>2)</sup>。

### IV 年 齢 分 布

10 代にピークがあり、加齢に伴い減少する<sup>3)</sup>(図 2-1)。

### V 自 覚 症 状

各病型ともに眼癢痒感、眼充血、眼脂、異物感が多く、SAC では、くしゃみや鼻汁、鼻閉などアレルギー性鼻炎の症状が多くみられる<sup>3)</sup>(図 2-2)。

### VI 自覚症状発現時期

3 月はスギ花粉による花粉症患者が増えるため、SAC, PAC ともに受診患者のピークがみられる<sup>3)</sup>。

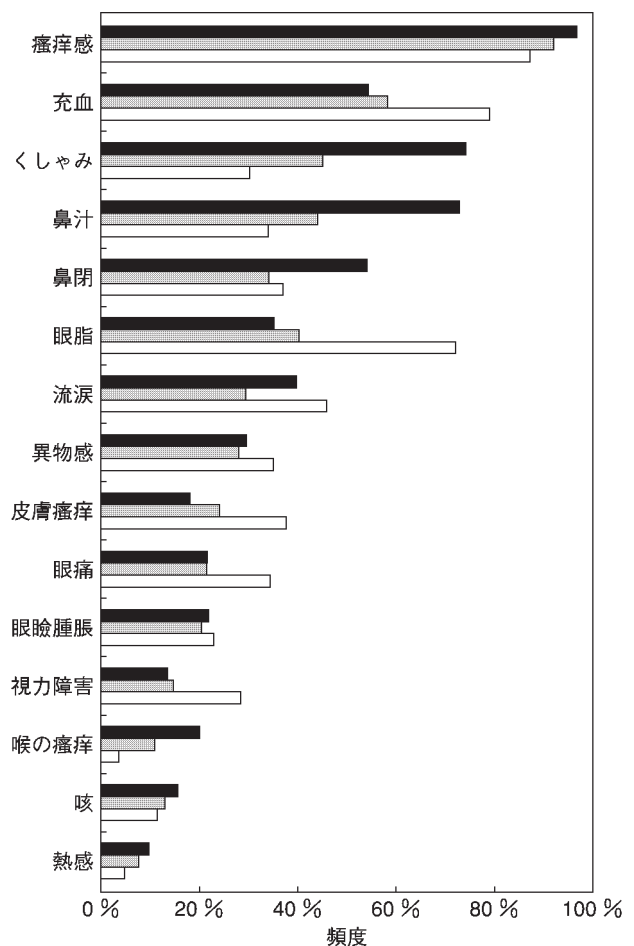


図 2-2 アレルギー性結膜疾患の自覚症状<sup>3)</sup>。

癢痒感が最も多くみられるが、充血、眼脂、異物感を伴う患者も多い。SAC では鼻症状を伴う患者が多く、VKC では充血、眼脂、視力障害を伴う患者が多くみられる(文献 3)より日本眼科医会の許可を得て転載)。

■ : SAC, ■ : PAC, □ : VKC